10. 露地ブドウ園における春播き草生栽培の特徴（情報）			
［要約］ 露地ブドウ‘ピオーネ’園において、ブドウ発芽期頃から成熟期にかけて草生栽培することで、本梢摘心後のおう盛な副梢生育がやや抑制されるほか、窒素やリンの下層への溶脱を軽減できる。しかし、牧草種子を春播き（４月）すると雑草との生育競合により雑草草生に移行しやすく、果実品質に対する影響も少ない。			
研究室名	化学研究室	連絡先	0869-55-0532

［背景・ねらい］

岡山県では一般に清耕栽培が行われてきた。草生栽培は果実品質の向上や肥料成分の溶脱防止に効果があるとされているが、一年を通じて草生栽培を行った場合、春先の養水分競合によってしばしばブドウの初期生育が不良となる。そこで、露地ブドウ園を対象に、発芽期ごろから成熟期にかけて草生栽培を行う「時期限定型」の草生栽培の特徴を明らかにする。

［成果の概要・特徴］

１．草生栽培を行うことで本梢摘心後の副梢のおう盛な生育はやや抑制された（図１）。
２．ブドウ根域外へ溶脱する窒素やリン量は、草生栽培によって減少した（図２）。
３．ブドウ葉中の窒素含有率は草生栽培によってやや低下したが、成熟果実品質に明らかな差は認められなかった（表１）。
４．時期限定型の草生栽培を３年間行ったが、樹勢低下は認められなかった。
５．牧草種子を春播き(４月)した場合、雑草との生育競合により雑草草生に移行する場合が多かった。

［成果の活用面・留意点］

１．樹勢や地力の高い圃場に導入する。
２．草生栽培によって、夏季に土壌が乾燥傾向となるため、潅水施設を持つ圃場に導入する。
３．春先の養水分競合を回避し、安定した牧草草生にするには、春先の除草を徹底するとともに、牧草種子を播種した後に充分な潅水を行う。

［具体的データ］

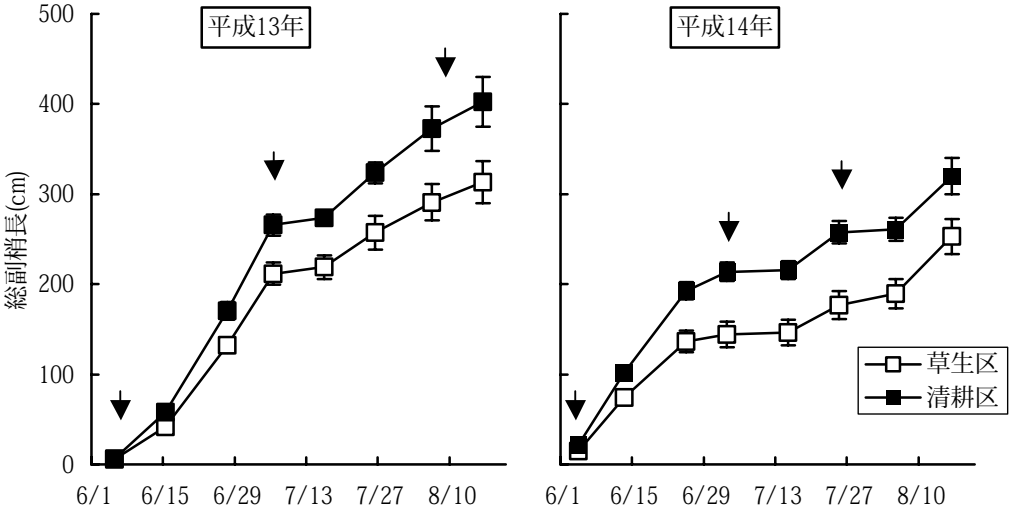

図1. 地表面管理の違いが総副梢長に及ぼす影響（矢印は摘心）

表1.　地表面管理の違いが果実品質に及ぼす影響

調査年次	処理区	房重	粒重	着色	糖度	酸濃度	糖酸比	硬度
		g	g	z*	Brix.	%(酒石酸換算)		y*
平成13年	草生区 x	454	15.9	7.5	19.9	0.54	37.4	39.2
	清耕区	493	16.3	7.4	19.2	0.56	34.3	39.1
	t-test	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
平成14年	草生区 x	647	15.9	6.1	18.5	0.52	35.9	43.6
	清耕区	623	15.7	6.3	17.7	0.53	33.6	46.1
	t-test	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

z カラーチャート示度、y ハンディヒット示度（値が大きいほど果肉が軟らかい）

x 平成13年はバヒアグラスを、平成14年はバヒアグラス、ペレニアルライグラス、トールフェスクを混播したが、雑草草生に移行した.

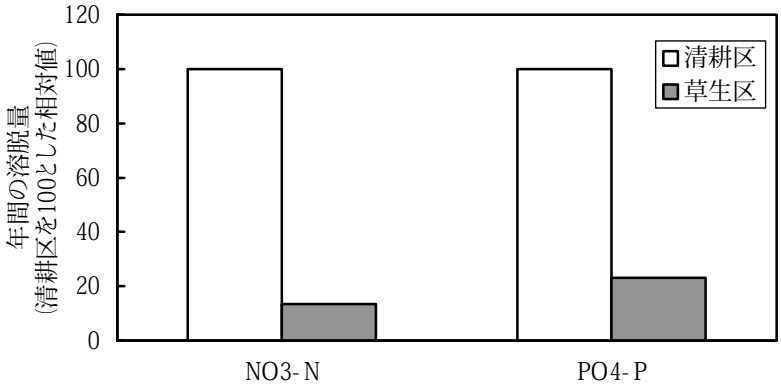

図2. 地表面管理の違いが硝酸態窒素及びリン酸イオン溶脱量に及ぼす影響

［その他］

試験研究課題・事業名：土壌保全対策事業

予算区分：国補（土壌保全）

研究期間：平成 10～14 年度

関連情報等：岡山県土壌保全対策事業成績書（平成 10～14 年度）